

**教育実践報告****国際コミュニケーションフィールド開講へ向けて  
—トライアルの概要、有用性及び課題—**

(Towards the International Communication Field Startup -an Outline,  
Strategies for Effectiveness, and Critical Considerations of the Trial Course)

中村 純子  
NAKAMURA Junko

**要旨**

産業界、教育界のグローバル化を背景に松本大学松商短期大学部ではグローバル化社会に対応できるコミュニケーション能力を有した中堅の人材の育成を目指し、2014年度国際コミュニケーションフィールドを開講することとなった。本研究報告書では開講に先だって行われたトライアルにおけるプログラムの概要、有用性、課題を明らかにする。プログラムは、① Interactive English、②留学生との協働プログラム、③コミュニケーション能力育成講座、④ TOEIC 集中講座、⑤ e-Learning の5つで構成されており、アンケート等の結果からは有用性は認められた。しかし、出席率が低く、特に⑤はあまり機能しなかった。⑤の実施方法について改善を要すると思われる。

**キーワード**

グローバル化 国際コミュニケーションフィールド トライアル コミュニケーション能力

**< 目次 >**

- I. 国際コミュニケーションフィールド開講の背景及び本教育研究報告書の目的
- II. 国際コミュニケーションフィールド・トライアルの概要
- III. プログラムの有用性
- IV. トライアルの課題及びまとめ

## I. 国際コミュニケーションフィールド開講の背景及び本教育研究報告書の目的

日本の大学の国際化は、産業界、教育界のグローバル化の流れを受け、急務と言える。それは地方の短期大学にとっても同様である。文部科学省も次々に高等教育のグローバル化のための事業を打ち出し、推進してきている。2014年度は文科省の打出した「スーパーグローバル大学等事業」<sup>1)</sup>において、県内では長野高等学校がスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定され、上田高等学校がスーパーグローバルハイスクールアソシエイトに選定された。この事業の目的は、若い世代の「内向き志向」を克服し、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる人材の育成を図るため、大学教育のグローバル化のための体制整備を推進することにある。一方、長野県の外国人雇用者数は1993年の10万人（直接雇用、間接雇用含む）から2011年は70万人近くに増加している<sup>2)</sup>。なかには採用の際のエントリーシートに、TOEICの点数等英語力を書かせる企業も出てきた。このような背景から松本大学松商短期大学部では、グローバルなコミュニケーション能力を持った中堅の人材を育てることを目標とし、2014年度国際コミュニケーションフィールドを開講することとなった。本教育研究報告では、その開講に先だって行ったトライアルについて、プログラムの概要を記し、その有用性、課題を明らかにする。

## II. 国際コミュニケーションフィールド・トライアルの概要

### 1. プログラム全体の概要

本トライアルの目的はグローバルなコミュニケーション能力をもった中堅の人材を育成すること及び、トライアルとして2014年度開講の国際コミュニケーションフィールドにおけるプログラムの有用性を見ることである。なお、グローバルなコミュニケーション能力を持った人材とは、異文化の人と円滑な人間関係の築ける人材である。そのためには、英語力のみならず、コミュニケーション能力、グローバル対応能力が必要である。

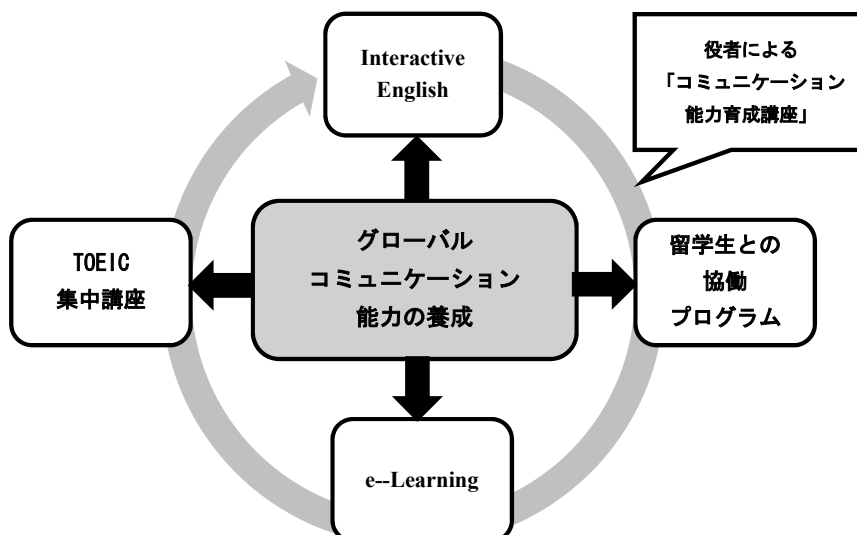


図1. 【国際コミュニケーションフィールド・トライアルプログラム】

これらを育成するために、本トライアルは図1のように大きく5つのプログラムを開講した。これらは福岡大学において林、小野（2013）<sup>3)</sup>らが実践し、効果をあげたプログラムである<sup>註1</sup>。英語力養成は主に、「Interactive English」、「TOEIC 集中講座」、「e-Learning」が担い、コミュニケーショ

ン能力育成には役者による「コミュニケーション能力育成講座」、グローバル対応能力育成は「Interactive English」、「留学生との協働プログラム」が担っている。これらのプログラムが有機的に結びつき、グローバルなコミュニケーション力の育成に繋がることを期待した。なお、本学の学生、学習環境に合うようにプログラムを随時改変し、実践した。期間と受講者数は以下である。

期間：2013年11月～2月【前半】 2013年3月【後半】

受講者数：前半15名 後半24名

受講した学生は、国際コミュニケーションフィールド・トライアルのオリエンテーションでプログラムに興味を持った学生15名である。後半のTOEIC集中講座では、開講に際し、再募集を行い、9名を加えて24名が受講者となった。

以下、それぞれのプログラムの概要を記す。

## 2. 「Interactive English」の概要

目的：①英語力養成

基礎力養成

「留学生との協働プログラム」で言いたいこと、使える表現、語彙の習得

②グローバル対応能力育成

日時：2013年11月～2014年1月 木曜日5限目 計7コマ

講師：オリバー・カーター先生

参加者：トライアル受講者 15名

内容：①基礎練習

②トピック・場面シラバスによる授業

「留学生との協働プログラム」と関連（自己紹介 地域自慢 異文化交流の意義）

英語力の向上をめざし、学生とネイティブの教員の双方向授業を基本とし、基礎練習と「留学生との協働プログラム」の内容を組み合わせで行われた。まず、基礎練習はメカニカルドリルの手法を使い、英語の基礎文型のレビューを行った。また、「留学生との協働プログラム」の内容を扱い、その準備を行った。特に第2回目の「留学生との協働プログラム」から、そのプログラム内容との連携を意識した。第2回目では外国語を使うことの有用性がテーマだったので、そのテーマに関してのディスカッションの内容を英語で考えさせたり、表現を練習したりし、さらにそれを全体へフィードバックするような形をとった。

## 3. 「留学生との協働プログラム」の概要

目的：グローバル対応能力育成

異文化を理解し、尊重の精神を養う。

共通語としての英語を使い、言語学習の意義理解を促し、学習意欲を育てる。

発表の体験から発信の意味と手法を学ぶ。

第1回

日時：12月21日（13：00～17：00）／22日（9：30～14：30）計8コマ

参加者：日本人学生：12名

留学生：アメリカ2名、ナイジェリア1名、台湾1名、オランダ4名（22日のみ参加）

テーマ：異文化理解がもたらす可能性

## 第2回

日 時：2月6日（9：40～12：50）2コマ

参加者：日本人学生：6名 留学生：アメリカ1名、ドイツ1名

テーマ：外国語を習得する意義



図2. 【留学生との協働プログラム】  
ディスカッション



図3. 【留学生との協働プログラム】  
プレゼンテーション

「留学生との協働プログラム」では、グローバル対応能力育成をめざし、それぞれのテーマでセッションが持たれた。そのうち1回目は外部委託機関（株）LbE Japan で訓練された留学生を中心に進められた。2回目はその訓練された留学生の手法を見て学んだ留学生を中心に進めた。まず、自己紹介、そしてテーマに対するグループリーダーのプレゼンテーション、全体でのディスカッション、まとめ、日本人学生によるプレゼンテーションという流れで進められた。（図2、3参照）

## 4. 役者による「コミュニケーション能力育成講座」の概要

目 的：①コミュニケーション能力育成

恥ずかしさ、コンプレックスの払拭

人前で自分を表現すること

②学生同士の交流の円滑化

日 時：1日目：11月15日（金） 15：10～18：20（2コマ）

2日目：11月16日（土） 9：40～12：50（2コマ）

13：30～16：10（2コマ）計6コマ

講 師：石部雄一氏（spica agency） 他2名（松本在住の役者）

参加者：1日目 16名（1名の卒業生を含む） 2日目 午前11名 午後7名



図4. 【コミュニケーション能力育成講座】  
感情表現



図5. 【コミュニケーション能力育成講座】  
人の指示を聞く、反応する

この講座は、コミュニケーション能力育成において工藤、小野（2014）<sup>4)</sup> から最も影響力を持つとされた心理特性「シャイネス」を払拭するのに効果があると思われる役者養成で用いられる手法を取り入れ行われた。たとえば、呼吸法・発声・活舌、イメージトレーニング、ボディートレーニング（喜怒哀楽を身体で表現）、感性トレーニング（即興劇・漫才・1分間スピーチ）等である（図4、5参照）。

このプログラムはトライアルの開講直後に行うことにより、学生同士の交流の円滑化を図ることも目的である。東京で実際の劇団で活躍する役者を講師に行われたが、「留学生との協働プログラム」と同様、継続性を考えて、地元の劇団員をアシスタントに加えた。

## 5. 「TOEIC 集中講座」の概要

目 的：英語力養成

日 時：3月2日（2コマ）、3日（2コマ）、10日（2コマ）、11日（1コマ）、12日（2コマ）、13日（2コマ） 計11コマ

講 師：TOEIC 概要：横川綾子氏

英語によるプレゼンテーション：黒崎真由美氏

リスニング：フレッド・カルース氏 リーディング・文法・語彙：林 英美氏

受講者：トライアル参加学生+希望者 計24名

プログラムの最後に学生の英語力の伸びを客観的に評価するために、TOEIC 集中講座を行った。この講座はTOEIC 専門家が2日間でリスニング、リーディングに分けて、必勝法を講義した。さらにリスニング、リーディングについて本学の非常勤講師が詳しく講義を行った。すべて英語による講演もあった。そして最後にTOEIC の模試を行った。この模試はトライアルを希望した学生の能力の伸びを測る目的で、トライアル開始時とトライアル最終日で全く同じ問題で行った。

## 6. 「e-Learning」

目 的：英語能力養成

英語環境に常に触れる

自分の能力に合わせた個人学習の実施

日 時：毎週火曜日～金曜日 9：00～9：30 + 学生各自のできる時間

教 材：English Central

対象者：トライアル受講者 15名

e-Learning の教材は English Central を採用した。この教材はスピーチに焦点をあてたオンライン上の英語学習教材で、音声付きのビデオ映像を見たあとに、その音声と同じスクリプトを自分の声で話したものを録音するという学習方法をとっている。録音した音声は音声認識技術によって自動解析されて、うまく発音できていない単語については、標準的な発音と自分の発音とを比較することができる。この発音の正確さなどで習熟度を図っていくシステムである。火曜日から金曜日の朝の9時から9時30分まで、自由にコンピュータ室で e-Learning を聞けるようにした。担当教員も時間の許す限り参加し、参加状況を把握した。学生はどこでもコンピュータにアクセスさえできれば English Central を聞くことができる。一斉授業での不備を補うためにも、また英語環境の不足を補うためにも e-Learning の役割は大きい。

### Ⅲ. プログラムの有用性

#### 1. 「Interactive English」×「留学生との協働プログラム」の有用性

「留学生との協働プログラム」はグローバル対応能力の育成—「異文化を理解し、尊重の精神を養う」、「共通語としての英語を使い、言語学習の意義理解を促し、学習意欲を育てる」、「発表の体験から発信の意味と手法を学ぶ」を目標に行ったプログラムであるが、目的は達成られ、有用性が認められたと考える。第1回の「留学生との協働プログラム」を終えた直後に、LbE Japan が実施したアンケート調査結果（回答者数 11 名）から、上記の目的が達せられたことを支持する結果が得られ、またプログラムの前後で学生の意識の変化も伺われたからである。以下、関連するアンケート結果を抜粋して記す。

表 1. 【留学生との協働プログラムのアンケート結果①】<sup>注2</sup>  
今回の研修の中で最も勉強になったと感じた活動は何ですか？

①アイスブレイキング	0名
②名物自慢	0名
③Wonderland Japan	4名
④リーダープレゼンテーション（1日目）	0名
⑤グループディスカッション（1日目）	1名
⑥グループプレゼンテーション（2日目午前）	2名
⑦リーダープレゼンテーション（2日目）	0名
⑧グループディスカッション（2日目）	3名
⑨グループプレゼンテーション（2日目午後）	1名

最も勉強になった活動として Wonderland Japan を 4 名があげていた（表 1 参照）。これは、留学生の日本に対するカルチャーショックを通して、日本を客観的に観ることができたからだと考える。また、学生自身が主体的に関ったグループディスカッション、グループプレゼンテーションを挙げた学生も 7 名いた（表 1 参照）。報告者はプログラム全体を通して発信力が弱い受講者が多いと感じていたが、学生は「発信の意味と手法」を学んでいたことが分かった。

次に、大きく学生の意識変化が見られた 3 点を抜粋して記す。

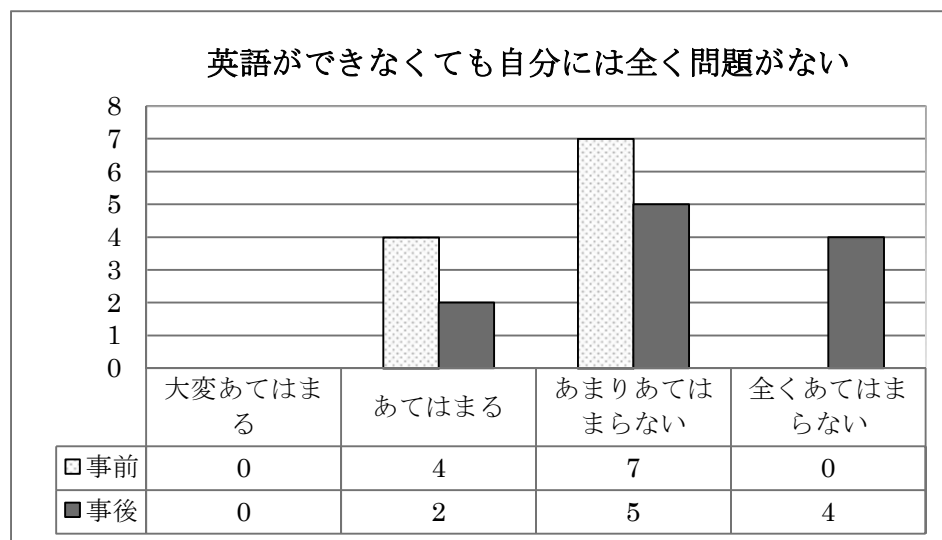


図 6. 【留学生との協働プログラムのアンケート結果②】

「英語ができなくても自分には全く問題がない」という項目に対して、事前には「あてはまる」としていた学生が4名いたが、事後は2名に減少している。それに対して、この項目を「全く当てはまらない」とした学生は事前にはいなかったが、事後4名に増加している（図6参照）。これは留学生とのディスカッション、プレゼンテーションなどを経験し、英語によるコミュニケーション力の必要性を感じ取ったからだと考える。

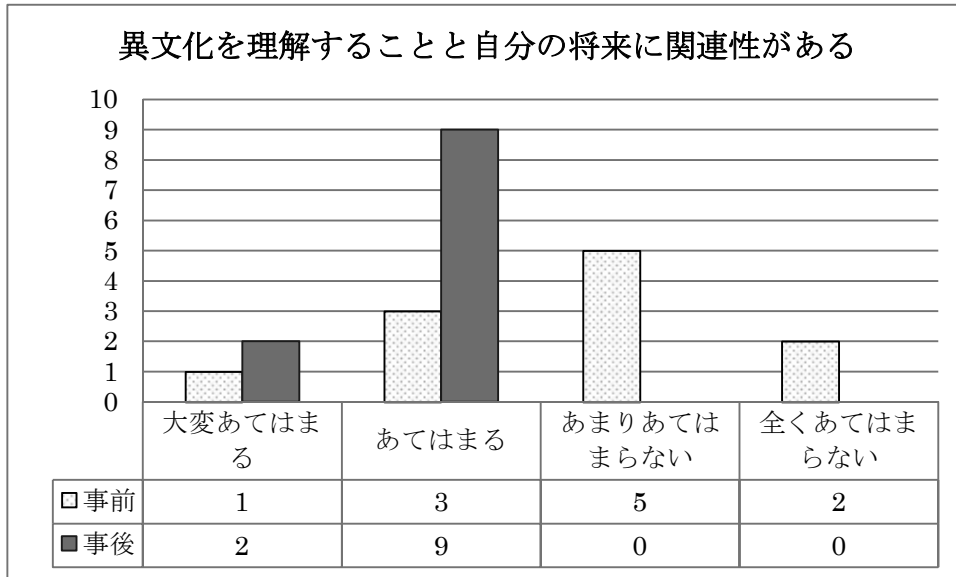


図7. 【留学生との協働プログラムのアンケート結果③】

「異文化を理解することと自分の将来に関連性がある」と答えた学生も事前と事後では大きく異なっていた。この項目を、「大変当てはまる」、「あてはまる」と答えた学生は事前では4名だったが、事後では11名全員となった（図7参照）。これは、この「協働プログラム」が単に英語に止まらず、日本人学生の中に留学生の文化をも理解しようという姿勢を生んだことを示す。さらに、その理解と自分の将来の関わりをも意識化したことを示している。

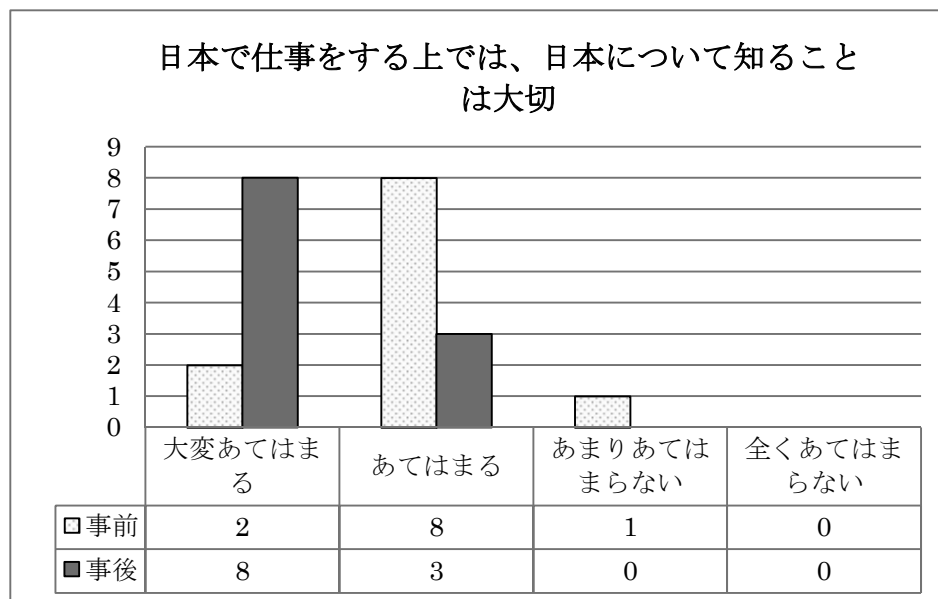


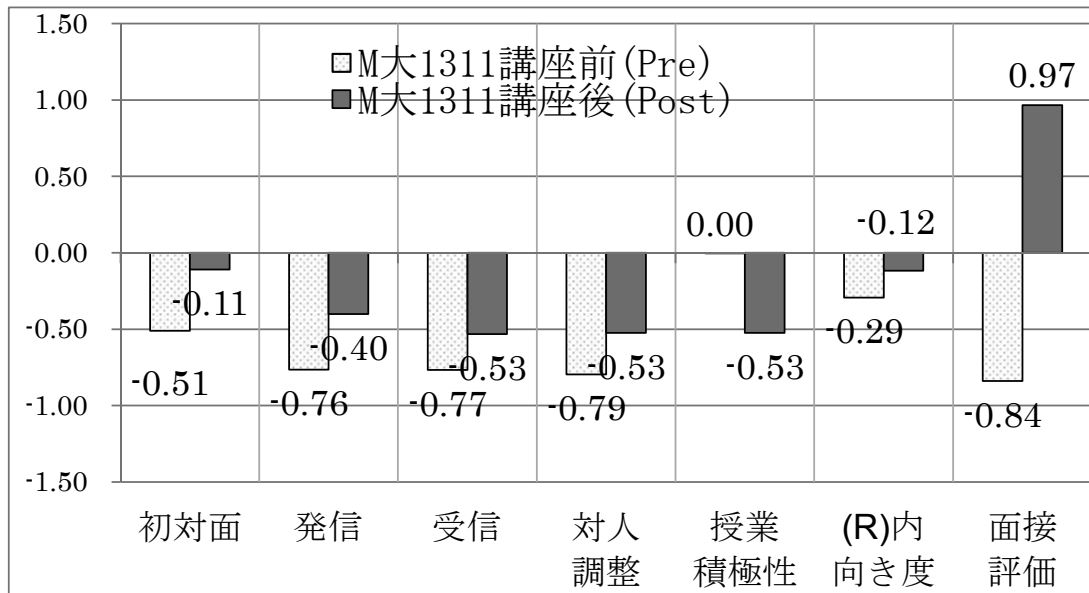
図8. 【留学生との協働プログラムのアンケート結果④】

また、「日本で仕事をする上では、日本について知ることは大切」という項目についても事前と事後で学生の意識に変化がみられた。「大変あてあまる」とした学生が事前2名から8名へと増加しているのである（図8参照）。これは異文化に触れ、自国のことを知る重要性を認識したことによると思われる。

このように、「留学生との協働プログラム」では、ともすれば表面的になりがちな留学生との交流を、あるテーマで深く話し合うことによって、英語によるコミュニケーション、異文化理解、自文化理解の重要性を日本人学生に認識させたといえる。また、同時に発信の大切さも学んだと考える。

そしてその基盤を作ったものが、Interactive Englishである。そこでネイティブの教員により基礎力が養成できたこと、そして特に「留学生との協働プログラム」の2回目を実施する事前の授業で、協働プログラムで取り上げるテーマについて考え、プレゼンテーションを行うのに必要な単語、表現を事前に練習できたことは大きいと考える。

## 2. 役者による「グローバル対応能力育成講座」の有用性



対応データ t検定 N 14

初対面積極性	発信力	受信力	対人調整力	授業積極性	(R)内向き度	面接評価
0.020	0.153	0.193	0.292	0.175	0.149	0.000
*	ns	ns	ns	ns	ns	***

\*\*\* : 0.1% \*\* : 1% \*5% ns:5%以上

図9. 【コミュニケーション能力育成講座効果測定結果】<sup>注3</sup>

このプログラムはコミュニケーション能力の養成—「恥ずかしさ、コンプレックスの払拭」、「人前で自分を表現すること」、および「学生同士の交流の円滑化」という目的の3点において、一定の効果があったと言える。本プログラムの前後で工藤が松本大学松商短期大学部参加者14名の初対面積極性、発信力、受信力、対人調整力、授業積極性、内向き度、面接評価の7点について質問紙法によるアンケート結果の分析を行った（図9参照）。有意差は初対面積極性、面接評価において見られたのみであるが、授業積極性を除き、数値的には6点に向上が見られた。そして、工藤、



小野 (2014)<sup>4)</sup>によると、これらに最も影響を与えている心理的特性がシャイネス、自尊感情であることから、恥ずしき、コンプレックス払拭という点である程度の効果があったと考える。学生同士の交流の円滑化という点でも、様々な活動を通して仲間意識が醸成されたようである。

### 3. 「TOEIC 集中講座」の有用性

本プログラムの目標は、英語能力の向上—TOEIC の点数の向上である。それは TOEIC 集中講座のみならず、全プログラムの成果の客観的な指標とも考えられる。トライアルの効果を測るために、このトライアルを始めた 2013 年 11 月に TOEIC 模試を実施し、全く同じ模試を TOEIC 集中講座の終わりに行った。両模試を受けたのは 8 名である。全体では事前が TOEIC 平均 444.375 点、事後が 468.125 点であり、平均 23.750 点伸びた。8 名中 6 名が伸び、中には 95 点も伸びた学生もいる。一方、マイナスになってしまった学生も 2 名いる。マイナスになってしまった学生の 1 人は睡眠不足もあり、模試に集中できなかったと述べている。もう 1 人の学生については TOEIC の前に集中的な学習をしていなかったことを報告している。トライアルのプログラムへの出席率との相関もあると思われるが、模試を受けた学生の数が 8 名と少なかったこともあり、出席率との明白な相関関係は示せなかった。

### 4. e-Learning の有用性

e-Learning については、15 名中、10 名の学生が 40% 以下の視聴しかしていなかったと自己申告をしているので、有用性という点については記述はできないと考える。やはり小野、酒井 (2005)<sup>5)</sup> 注<sup>4)</sup>、でも言われているが、e-Learning については学習状況を教員側がチェックをするシステムの構築、さらには林 (2013)<sup>6)</sup> のように e-Learning を授業内で教材として活用し、インタラクティブな環境を提供するなどが必要である。このようなシステムが構築されれば、英語環境の乏しい日本人学生の英語環境の不足を補うことができ、英語学習に大変有用だと思われる。特に、教材に選んだ English Central はその教材の豊富さ、面白さから多くの学生の興味を引きつけると考える。

### 5. フォローアップインタビュー

トライアル終了約 1 か月後、トライアルについてのフォローアップインタビューを受講者 15 名全員に行った。「トライアルを受ける前と受けた後で何か気持ちに変化があったか」という問いには「外国人とのコミュニケーションに対して、抵抗感が減った」と答えた学生は 12 名、「文法が完璧でちゃんとした文で話さないといけないという考え方をしなくなった」、「相手が一生懸命伝えようとしてくれたので、こちらも理解する努力をしようとするので、抵抗感は減ったと思う」、「恥ずかしさから、コミュニケーションをためらっていたが、間違えても大丈夫だと思って、話すことができるようになった」というコメントがあった。また、英語でのコミュニケーションに対しての抵抗感についても 12 名が「減った」と答えた。「単語だけでもコミュニケーションがとれることを実感した」、「日常でちょっとだけだけど、英語を使うようになった」などのコメントがあった。

その他の変化では、「会話が分からないのがくやしいと思うようになった」、「コミュニケーション能力育成講座を受けて、日常でも自分を表にだすことができるようになった」、「対人関係で悩むことが減った」など、単に英語の学習に止まらず、このトライアルを機に生き方の姿勢までもが変わってきたことも伺われる。

### 6. プログラムの有用性まとめ

以上の結果から、これらのプログラムを受講したことにより、学生の英語力、コミュニケーション能力、グローバル対応能力が向上したと考える。つまり、これらのプログラムには学生のグローバルなコミュニケーション力を向上するのに有用性があると言える。

#### IV. トライアルの課題及びまとめ

本プログラムには有用性は認められたが、課題も見えてきた。「Interactive English」及び「留学生との協働プログラム」については、その有機的な結びつきが課題となる。第1回「留学生との協働プログラム」の開催時、トライアル参加者の英語力の不足により、留学生からの質問に反応できない場面も多々あった。その反省から2回目の協働プログラムではその回で扱うテーマ、表現を「Interactive English」で事前に学習し臨んだ。これによって、「Interactive English」ではインプットとアウトプットがうまく結びつき、「留学生との協働プログラム」では、よりコミュニケーションがスムーズにいくという効果はあったと思われる。しかし、両プログラムともに出席者の人数が少なかったため、その効果の十分な検証には至っていない。

また、「留学生との協働プログラム」における留学生の人材の確保及び育成も大きな課題である。1回目のプログラムでは外部委託機関 LbE Japan によって訓練された留学生がプログラムをリードしてくれた。2回目のプログラムでは、1回目にも参加した地元の留学生がリードをしてくれたため、プログラムもスムーズに運び、その結果として日本人学生の英語、および外国人とのコミュニケーションにおける抵抗感が軽減するという意識改革がなされたといえる。しかし、今後このような留学生の人材が得られるという保証がない。留学生の人材の確保と育成はこのプログラムを実施する上での最大の課題である。

役者による「コミュニケーション育成講座」では、既述の通り効果はあがったが、本学の学生の消極さもあり、十分とはいえない。とくに、講座終了後、外向きになった雰囲気はどう維持していくのが課題であろう。

「TOEIC 集中講座」は点数で言えば、効果が著しくあった学生もあれば、あまり変化がなかった学生もいる。その要因は様々考えられるが、1つにはプログラムの出席率の低さがあげられよう。

全体的には本プログラムはグローバルなコミュニケーション能力の育成、英語力の向上において一定の効果があがったといえる。しかし、出席率の低さのため、著しい成果までは上げられなかった。これはプログラム自体の問題というよりも、プログラム実施が5コマ目、または週末、年度末であったこと、大学の他の行事との重複、資格試験、就職活動という短期大学生が抱える事情、さらにアルバイトをしなければならないという経済的事情によると考えられる。事実、既述のフォローアップインタビューで、プログラムへの出席率の低さの理由を尋ねると「日時が合わなくて出席できなかった」という学生が15名中、13名と最も多かった。さらにトライアルは単位化されていなかったため、成績がつかなかったことも要因であろう。2014年度からは単位化されることにより、出席率に関しての懸念はなくなる可能性が高い。しかし、e-Learning については、日時に関係なく視聴できたはずなので、「日時が合わなかった」ことは理由にはならない。e-Learning を学生の自主性に任せるといったやり方では効果があがらないことは明らかである。今後は授業に組み込む、チェックをするシステムを構築するなど、教員の学習支援の方法を講じる必要がある。

また、これらのプログラムが有機的に機能するような本学の学生に合わせた教材を作成し、持続可能なプログラムに成長させる必要がある。さらに、プログラムに適性のコマ数、時間なども今後検討していかなければならない。

国際コミュニケーションフィールドの立ち上げは、グローバル化時代における大学教育の具現化した1つの形と考える。松本大学が目指してきた地域の中核となる大学、それにもグローバルな視点が欠かせない時代となってきた。本フィールドをグローバルなコミュニケーション力を備えた人材の育成を担えるフィールドに成長させていきたい。

## 謝辞

本トライアルの実施に際し、福岡大学の小野博教授に多くのご助言、ご教示を賜った。また、大阪体育大学の工藤俊郎教授には役者による「コミュニケーション能力育成講座」の効果を測るための質問紙による調査、分析に関してご協力頂いた。本学短期大学の教員、担当事務職員の方のご協力、「留学生との協働プログラム」にボランティアで参加してくれた留学生、ビデオ録画を担当してくれた学生の協力も大きい。記して感謝申し上げます。なお、本トライアルは実施するにあたって教育推進研究助成費を頂いた。また、運営に関しては、以下に記す運営委員による検討会議を持ちながら進められた。

国際コミュニケーションフィールド 検討委員

糸井重夫 山添昌彦 藤波大三郎 浜崎央 オリバー・カーター 中村純子

## 注

- 1 福岡大学には2013年度に新設された教育プログラム「Global Active Program」GAPがある。このプログラムの公開プログラム、研究会（2014年6月14日～16日、21～23日）に本学の国際コミュニケーションフィールド検討委員が参加し、効果を確認した。GAP開設についての詳細は林、小野（2013）<sup>3)</sup>を参照。
- 2 表1、図6、7、8は（株）LbE Japan作成のアンケート調査の結果を基に本報告者が作成したもの。分析は本報告者が行った。
- 3 図9は、工藤（大阪体育大学教養教育センター）が作成した質問紙による調査を役者による「コミュニケーション能力育成」講座の前後に行い、工藤が分析を行った結果である。分析方法は工藤、小野（2014）<sup>4)</sup>を参照。
- 4 小野、酒井志延（2005）によると e-Learning における学習で教師らが積極的に出席を促し、学習進捗のモニタリングを行った大学が最も顕著な英語力伸長が観測されたことが報告されている。

## 参考文献

- 1) 文部科学省. スーパーグローバル大学等事業.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1319596.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1319596.htm)2014-5-6
- 2) 糸井重夫. キャリア教育からグローバル人材育成へ. 平成25年松本大学公開講座資料(2014-2-24)
- 3) 林裕子, 小野博. リメディアル英語教育からグローバル対応英語能力の育成へ. リメディアル教育研究8(2). 259-269 (2013)
- 4) 工藤 俊郎, 小野 博. コミュニケーション能力育成講座とその効果測定. グローバル人材育成教育研究1(1). 46-54 (2014)
- 5) 小野博, 酒井志延. e-learning による英語リメディアル教材の検証実験. NINE 研究報告日本の大学生の基礎学力構造とリメディアル教育6. 111-116 (2005)
- 6) 林裕子. CALL教材と協働学習を取り入れたインタラクティブな英語授業の実践. 第1回全国大会招待講演資料 グローバル人材育成教育学会. 8-9 (2013)